

● 優秀賞

冬に行う運動を子どもが意欲的に取り組む 体育学習

三重大学教育学部附属小学校 さ こう ひ で と 酒匂秀人

1 はじめに

これまで、体育学習において、子どもが自ら教具、場やルール、動きを工夫し、楽しみながら意欲的に取り組む姿を求めて授業を行ってきた。

そんななかで、冬季に雪や氷が日常的にない環境でも、雪や氷がある環境で行う運動と似た運動を行い、その運動で得られる特性、つまり、その運動の楽しさを感じさせることはできないだろうかと考えた。その背景には、学習指導要領には、「内容の取り扱い」に「自然とのかかわりの深い運動として、雪遊び、氷上遊び、スキー、スケートなどの指導については、地域や学校の実態に応じて積極的に行うことを留意する。」として取り上げていることにある。それは、今回の指導要領の改訂のポイントの1つとして取り上げられ、それらの運動を積極的に取り入れていくことを強調されているということである。

そこで、本来なら本校はその地域には当てはまらないが、子どもにとっても魅力ある、雪遊びやスキー、スケートの運動を取り上げ、子ども自ら教具・場やルール、動きを工夫するといった意欲的な姿が見られる体育学習を目指し、題材を創るとともに、子どもたちを指導し実践を行っていかうと考えた。

2 冬に行う運動を子どもが意欲的に取り組む体育学習にしていくために

(1) 子どもが新鮮さを感じる運動を工夫する

子どもが新鮮さを感じる運動とは、基になる運動の特性を考慮するとともに、子どもがその運動と出合ったとき、「おもしろい。」「やってみたい。」といった好意的な感じ方で捉え、教具、場・ルール、動きも工夫をしていくなかで、これまで感じたことのない楽しさを感じるように設定した運動である。

子どもが新鮮さを感じることで、その運動によって得られる楽しさを何度も感じようと、強い願いを持って意欲的に運動に取り組むようになると考えた。そのためには、次のようなことが大切であると考えた。

- ①自分の持っている力以上の力が出せたと感じられる。
- ②体の感覚に強く働きかけられる。

(2) 子どもの願いや思いに基いて、振り返らせる

子どもがある運動に継続的に取り組んでいくと、「～したい。」「～ができるようになりたい。」といった願いや思いを徐々に強めていく。その過程では、今できることを何度も繰り返し、その感覚を楽しもうと意欲的になる。しかし、一方で、「～したいができない。」といった問題と捉えたり、「難しい。」と感じたりすることも生じてくる。その過程においても、子どもたちは何とか自分の願いや思いを実現しようと挑戦意欲を駆り立てられる。

そこで、ここでは特に指導者の指導が必要だと思われる、うまくいかないと感じているところを取り上げて話し合わせ、子どもの考えや動きの違いを見極めさせながら、取り入

れさせていく。

そのためには、次のような段階、視点で話し合う時間を設定していく。

- ①導入直後、教具、場やルール
- ②題材導入した中盤において、動きについて

3 授業の実際

本章では、冬に行う運動を3ケ年かけて行った次の4つの実践で説明したい。

- (1) 室内（くつ下）ホッケー
- (2) 旗取り合戦（雪合戦）
- (3) スーツと滑ろうⅠ（スケートの運動）
- (4) スーツと滑ろうⅡ（スキースキの運動）

(1)室内（くつ下）ホッケー（5年）

ア 題材、ねらい、学習計画について

「室内ホッケー」は、5人対5人のチームで、靴下になり足を滑らせながらペットボトルと棒で作ったスティックを使って玉入れの玉を運び、4分間にゴールした得点を競う運動である（写真1）。



●写真1／室内ホッケーのゲーム

本題材のねらいは、相手チームのいないコート隅から玉を転がしながら進む、ゴール前に相手チームがいないところをねらってパスやシュートをするといったように攻め方を工夫したり、相手チームのパスをカットする、ゴール近くで相手チームに玉が渡ったらゴー

ル前に戻るといったように守り方を工夫したりして精いっぱい運動することができるようになることである。そして、次のような学習計画で行った。

- ①いろいろな動きを試す 1時間
- ②ルールについて確かめる 1時間
- ③相手を知り、作戦を立てる 1時間
- ④リーグ戦をする 4時間
- ⑤対抗戦をする 2時間
- ⑥トーナメント戦をする。 1時間

イ 子どもが新鮮さを感じる運動を工夫する

本題材は、そもそも子どもたちがホッケーに興味・関心を示したことから始まった。導入前に、冬に行う運動やスポーツと言えばどんなものを浮かべるか尋ね、体育の授業でやってみたいものを2つ選んで手を挙げさせた。その結果、「アイスホッケー36人」「雪合戦35人」「スピードスケート5人」「スキージャンプ3人」「フィギュアスケート1人」というようにアイスホッケーが最も多かった。しかし、このような冬のスポーツと言えば、雪、氷が必要であるが、本校での気象条件を考えるとそれらが常に備わっている条件はほとんどない。

しかし、冬に行う運動の特性を考え、題材を工夫すればこれらの運動にも親しませることができるのではないかと考えた。本題材で取り上げる床を滑るという動きは、どちらかというと非日常的な動きであるが、子どもたちは、氷が地面に張っているときに、その上を滑ってみた経験があり、そのときの感覚が心地よいものと捉えていると考えた。その動きを継続的に行うことで、「滑る」動きを快感と捉えると考えた。そこで、靴下で運動を行うことにした。靴下で滑るということは、自分の力以上の力が出せる。また、体の感覚に強く働きかけることができると考えた。さらに、スティックで打って玉が滑っていくことにも体に強く働きかけると考えた。

ウ 子どもの願いや思いに基いて、振り返らせる
 題材導入後、子どもたちにどんな靴下がよいか考えさせたところ、「厚手の靴下が良い。」「2枚重ねにするとよく滑る。」といった発言が聞かれた。中には、写真2のように左右のすべり具合を変えることで、強くけることができ、種類の違う靴下を履いている子どももいた。

また、初期の段階で滑って転んだときに、頭のケガを防ぐために家庭にあるヘルメットを持ってくるように促した。中には、肘や膝を守るためのプロテクターを持ってくる子どもや自作のヘルメット（写真3）を作ってくる子どもがいた。

さらに、本題材で用いるスティックは、ペットボトルや使えなくなったほうきの柄を使った子どもたち一人一人の自作である。子どもたちは、いったん作り終えゲームを行っていく過程でも、パスやシュートがしにくいいため、作りかえたり作り直したりして、自ら運動にかかわっていきこうとする子どもの姿が見られた。子どもが作ったスティックは、写真4のように、大きさ、角度、グリップなど



●写真2 / 種類の違う靴下を履いている様子



●写真3 / 子どもが作ったヘルメット



●写真4 / 子どもが作ったスティック

様々な工夫が見られ、その子どもの考えが表れていた。

「滑る」ことにかかわって、第1時の子どもの感じ方は表1のようなものであった。

運動する立場	運動を見る立場
<ul style="list-style-type: none"> ・本当のアイスホッケーみたいに滑ったしすごく楽しかった。 ・滑るときにこけそうで怖かったけど、楽しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やっている方は一生けん命だけど、見ているときも楽しかったです。わけは、くぎり（跳び箱調節器）の後ろで見ていると、目の前にボールが来たとき、みんなが滑ってきてすごい迫力だったからです。

●表1 / 第1時後の子どもの感想の抜粋

次はルールについてである。

始めに提示したルールは、スティックを頭の高さまで振り上げてはいけない、玉を手で触ってはいけない、キーパーはつけないということであった。この後、第2時にはゲームを進めていく過程で子どもが出してきた問題を取り上げて話し合わせた。

例えば、次のようなことであった。

- ボールを取りにくいからスティックの大きさを小さくしてほしい→人によってやりやすさが違うから、今のままでよい。
- スティックが体に当たったら痛いからファールにしてほしい→「判断しにくいから入れない。でも、当たらないように気をつける。」
- キャプテンが点を入れたら2点→「チーム作戦に結びつくからよい。」
- キーパーをつける→「人数も位置も全て

自分たちで考える。」

これらのことから、子どもたちは、寛大であると感心するとともに、自分たちの作戦をかなり意識して取り組んでいた。

次に動きについてである。

題材前半でのリーグ戦で、「あいうえおチーム」は、1勝もできなかった。その過程で、M男は、「全然勝てないので何とかしたい。」という願いを持っていた。その願いを実現しようと作戦を必死になって考えるようになった。その結果、3回戦になって引き分けのゲームが2ゲームあった。周りのチームからも強くなってきていると認められていた。

リーグ戦の結果

	あいうえお	スピードホッケーズ	ブラックドクロ	マヨパワーチャンピオンズ
1回戦		×	×	×
		1対6	1対2	0対2
2回戦		×	×	×
		0対3	0対1	0対1
3回戦		×	△	△
		0対3	0対0	1対1

対抗戦の結果

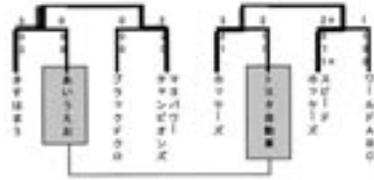
	あいうえお	スピードホッケーズ	ブラックドクロ	マヨパワーチャンピオンズ
あいうえお		×	○	×
		前半0対1	前半2対0	前半2対3
		後半0対1	後半3対0	後半2対2
		合計0対2	合計5対0	合計4対5

表2/あいうえおチームのリーグ戦と対抗戦の結果

そして、ブラックドクロチームとの対戦で、5対0で初勝利した。そのときM男は次のように書いている。

初勝利したのでうれしかったです。作戦を考えると、動く人、あまり動かない人、玉を飛ばす力がある人、キーパーに向いている人考えたところがよかったです。(以後 略) (第7時のM男の学習カードより)

また、トーナメント戦(対戦表の一部を図1に表す)では、「きすはまうチーム」と対戦し負けてしまったが、その後のトヨタ自動車チームとの対戦では5対0で勝った。題材全体を振り返って、M男のいる「あいう



●図1/トーナメント表の抜粋

えおチーム」は、ゲーム結果を見ると13試合中2勝しかできなかったことになる。

しかし、M男は作戦を立てる、つまり、動きを工夫することの大切さを感じていた。

本題材を終え、子どもたちは、授業で行ったことだけで満足できず、朝の会や休み時間、放課後の遊びの中で運動場で行うようになり活動自体も工夫していった。写真5は、朝の会にハンドベースボール用のボール3個を使ってゲームをしている様子である。また、これらの運動を行っていくなかで、子どもたちは、教具やルールそして学校生活の遊びの工夫をしていった。

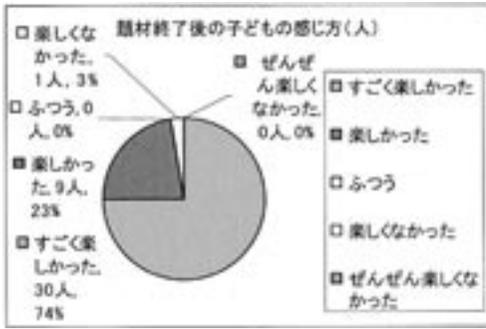
また、題材を終えた子どもの感じ方は、肯



●写真5/朝の会で遊んでいる様子

全体を通してよかったことは、ブラックドクロ戦で初めて5対0で勝ったことです。(略) 試合は作戦しだいで勝るとわかりました。最初の作戦タイムが勝負。

(略) ホッケーが楽しいから放課後も勝真君たちとやるようになって、白井さんや竹内さんなどの女子の友だちも多くなりました。(第10時のM男の学習カードより)



●図2／題材終了後の子どもの感じ方

定的に捉えている様子が子どもの学習カードや図2からもうかがえる。

(2)旗取り合戦(6年)

ア 題材,ねらい,学習計画について

「旗取り合戦」は、10人対10人で対戦し相手が投げた玉に当たらないようにしながら相手陣地に攻め込み、相手チームよりも早く相手の旗を自陣に持ち込むゲームである。これは、前述の冬に行う運動でやりたい運動として、2番目にやりたいと言っていた雪合戦を意識した運動である。

本題材のねらいは、相手の旗を取ろうと相手があまりいない場所を素早く走ったり、相手が投げた玉をかわしたりするとともに、自分のチームの旗を守ろうと相手をよく見て、玉を投げるといったような動きを工夫していくことである。そして学習計画は、次のとおりである。

- ①試しの運動をする。 1時間
- ②場やルールを工夫してゲームを行う 2時間
- ③動きを工夫しながらゲームを行う 3時間

イ 子どもが新鮮さを感じる運動を工夫する

本題材では、雪合戦の正式競技ルールを参考にし、雪玉の代わりに玉入れの玉を用いた。第1時には、相手の玉に当たらないように相手陣地にある旗を持ち帰ることと、相手に玉を当ててコート外に出し、自分のチームの旗

を守ることを伝えゲームを行った。多くの子どもに人気の高いドッジボールでは、コート内にいる人をめがけているが、さらに大きなコートで、しかも相手を追いかけながら玉を投げるといった動きには新鮮さを感じると考えた。また、自分に向かって玉が飛んでくるスリルは強く働きかけられると考えた。

実際に授業を進めていくと、子どもたちはすぐに当てられてしまうという問題に直面した。

ウ 子どもの願いや思いに基いて、振り返らせる

そこで、どうしたいか第2時に話し合った。すると、次のような考えが出た。

H男：ほくは、跳び箱を使って相手の玉を防ぐようにしたいです。

K男：ほくは、跳び箱は自分たちのチームで置く場所や置き方を決めたいです。

子どもたちは、チームでその跳び箱を前後に置いたり(写真6)、跳び箱の置き方をV字



●写真6／防護壁を前後に並べて置く



●写真7／防護壁をV字に並べて置く



●写真8/牢屋を置いた様子

にしたり(写真7)していった。それらの工夫で試してみたものの、これだけでは当たったらコート外に出るといった問題の解決には至らなかった。

そこで、「もし相手チームの友だちに玉を当てられても、牢屋のような場所をつくり味方にタッチされたら、もう一度攻められるというルールを入れたい。」という声が挙がった。それが、採用されることになり写真8のように、それぞれのチームの牢屋をライン際に配置していった。そうすることで、玉を当てられても味方にタッチしてもらい、何度も攻めたり守ったりする意欲的な姿が見られるようになった。

次に動きについてである。

子どもたちが考え出した作戦は、次のようなものであった。

攻め方について考えさせていく授業では、「一斉に走り出して攻める。」「壁側を通して相手に見つかりにくいように進む。」「おとり役を決めて、そっちに気を取られている隙に旗を取りに行く。」などが出された。

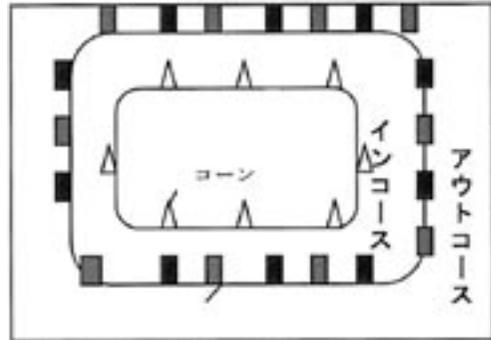
守り方について考えさせていく授業では、「遠くの敵を当てる役と近くの敵を当てる役を決める。」「玉が無くなるといけないので、相手が近づいてくるまで玉を投げない。」「相手が玉を投げようとしてきたら、跳び箱に顔を伏せておく。」などが出された。

このような営みを経て、子どもたちは、残り時間も考えながら、チームでの役割や位置

を考えながらゲームを行うようになった。

(3)スーツと滑ろうⅠ(5年)

ア 題材, ねらい, 学習計画について



●図3/スーツと滑ろうⅠの場



●写真9/スーツと滑ろうⅠの様子

スーツと滑ろうⅠは、体育館をスケートリンクに見立て、インラインスキーの靴を履き、滑らかに滑って楽しむようにした運動である。

本題材の主なねらいは、滑らかに滑ろうと進むコースやターンのタイミングを工夫したり、軽く前傾し、膝を深く曲げ、腰の位置を下げて重心移動を行うといった動きを工夫したりして、精いっぱい運動できるようになることである。そして、学習計画は次のとおりである。

- ① 試しの運動 1時間
- ② 場や動きを工夫しながら運動する 3時間

イ 子どもが新鮮さを感じる運動を工夫する

本題材では、体育館でインラインスキーを

使うことで、滑らかに進みスケートとよく似た感覚で運動することができると思った。そして、自分の力以上の力が感じられ、風を切ったり滑らかに滑ったりする感覚が強く体に働きかけられると考えた。

ウ 子どもの願いや思いに基いて、振り返らせる

第1時には、体育館にアウト・インの2コースを設定し滑るように促した。

子どもたちは、恐る恐る滑る感覚を確かめようと、スピードの出し方や曲がり方などについてすぐに問題を捉えた。

そこで、第2時にはどうすると滑ることができるか話し合った。子どもたちは、「後ろへ蹴るとよい。」「片足を少し上げてバランスを取るとよい。」「ハの字に蹴り出すとよい。」「カーブでは、特に右足に重心をかけると曲がりやすい。」などの考えを出した。子どもたちは、それらの考えによさを感じて取り入れ、徐々に滑らかに滑ることができるようになっていった。

すると、子どもたちは徐々に自分のやりたいことを見失う状態になった。

そこで、第4時にはもっと楽しめる場できないかたずねたところ、子どもたちは、「坂道を作ってほしい。」という要望をあげてきた。それが、写真10・写真11のような場である。子どもたちは、このような坂道を作ることで、再び意欲的な姿を見せるようになっていった。



●写真10/坂道を加えた場 1



●写真11/坂道を加えた場 2

(4)スーッと滑ろうⅡ (5年)

ア 題材、ねらい、学習計画について

スーッと滑ろうⅡは、坂道をスキー場に見立て、インラインスキーの靴を履き、滑らかに滑って楽しむように設定した運動である(写真12)。



●写真12/スーッと滑ろうⅡの様子

本題材でのねらいは、滑らかに滑ろうと、進むコースやターンのタイミングを工夫したり、軽く前傾し膝を深く曲げ、腰の位置を下げて重心移動を行うといった動きを工夫したりして、精いっぱい運動できるようになることである。また、友だちと交差する、友だちの後を滑るといった簡単なフォーメーションをグループでつくろうと、滑り始めの位置や

コースなどについて、考えを出すといったように、友だちとかかわり合いながら運動できるようになることである。そして、学習計画は次のとおりである。

①試しの運動をする 2時間

②体の各部位の動きやグループでの滑り方を工夫して滑る 3時間

イ 子どもが新鮮さを感じる運動を工夫する

本題材では、前述のようにインラインスケートの靴を履き、園芸用の支柱をストックにし(一部は自分のスキー用のストックを持参)、坂道をスキー場のゲレンデに見立ててスキーのような運動にした。このような設定にしたのは、現在、スキーヤーの間でも、インラインスキーが少しずつ脚光を浴びてきているからである。本題材で取り上げるインラインスキーは、スキーにおける操作や運動、滑走するときの①ポジション②回旋運動③外向姿勢④切り換え動作⑤足裏感覚といった共通する感覚が多く、夏場のトレーニングの一環として行われるようになってきている。そうしたことから、近年では、スキー雑誌で取り上げられたり夏場に各地でインラインスキー大会が頻繁に行われたりするようになってきている。

インラインスキーの運動では、子どもたちは、立っているだけで滑っていくことから、自分の力以上の力が出せることを実感するとともに坂道を滑り降りるときのスピードの感覚はとても強く働きかけられると考えた。

実際に行った第1時の授業では、子どもたちが次のような感想を持った。

今までは、中でして、そのときはコンクリートみたいにこけても痛くなかったけれど、今日からは坂道ですごい勢いで滑ってみたりコンクリートで滑って見たかったのでわくわくしていました。実際、外で滑ってみると、中より勢いがついてそれに坂道なので楽しかったです。

(第1時のS男の学習カードより)

最初に滑るときは少し怖かったので、低いところから試しました。平らの地面よりも楽しかったし、Iでたくさん練習したので、こげずに

スーッと滑れました。

次には、高いところから滑りました。高いからスリルがあって楽しかったです。うまくいかないのはジグザグです。

(第1時のT子の学習カードより)

ウ 子どもの願いや思いに基づいて、振り返らせる

第1時のT子のような子どもが他にもいたので、第3時には曲がり方を取り上げて話し合った。

子どもたちは、「外側の足に体重をかけるとよい。」「膝を内側に曲げるとよい。」「内側の足を少し浮かせるとよい。」といった考えを出してきた。

これらのことを試していくなかで、滑らかに滑ることができるようになっていった。第1時にうまくいかないと感じていたT子は次のように振り返っている。

1回目、ひざを曲げてすべるのを試してもうまくいかずまっすぐに滑ってしまいました。2回目、怖がりながらもやってみると、少しだけ曲がることができました。次の練習の時間が楽しみです。(第3時のT子の学習カード)

すると、T子をはじめとして、滑らかに滑ることができるようになった子どもたちは、徐々に活動が停滞していった。

そこで、グループで滑り方を工夫してみる



●写真13/前に続いて滑っている様子

ように促した。また、その手がかりにするために、斜面にはチョークで2通りの間隔でマークをつけた。子どもたちは、当初、戸惑いながらも、徐々にスタート地点を変えて、クロスしたり前の人の後について列になったりして滑るようになっていった（写真13）。

4 おわりに

本実践では、室内ホッケー、スーッと滑ろうⅠ・Ⅱについては、「滑る」というスキー・スケートの運動で、旗取り合戦は、雪合戦をもとにした雪遊びといった冬に行う運動を取り上げた。

本実践において、題材を構想する段階で子どもに何を学ばせるかを考えるために、運動の特性を考慮し、子どもが新鮮さを感じるように運動を工夫することで、子どもが強い願いを持つとともに、意欲的に学習に取り組んでいくことが確かめられた。

これらの実践の中で、その象徴ともいえるべき出来事は、次のようなことであった。

室内ホッケーの最終の第10時のことである。トーナメント戦で1位と2位を決める対戦チームは、「きすはまうチーム」と「スピードホッケーズ」であった。

後半が終わったときには、1対1であった。トーナメント戦で同点の場合は、Vゴール方式で決めることになっていたもので、そのままゲームを続けた。その結果、「スピードホッケーズチーム」が勝った。ゲーム後、「きすはまうチーム」の1人の子どもT男がうずくまっていた。その周りを同じチームの子どもたちが取り囲んでいた。どうしたのかと聞いてみると、周りの子どもが「T君すごく悔しいって。」と言った。顔を見ると涙を流していた。わたしの経験で、体育の授業で悔し涙を流したのは、これが初めてであり最後でもある。

子どもが願いを実現していくための指導と

して、子どもの願いや思いに基いて振り返らせることも大切であることが確かめられた。そのときの、段階や運動を行っていく過程で、場やルール・教具について話し合う過程では、一人一人の考えのよさを認め合う様子がうかがわれた。それは、子どもが「たくさん得点したい」「うまく滑りたい」といった強い願いを持ち、運動に取り組んでいたからであると考えられる。つまり、一つの活動に対し、強い願いを持たせることで、その子らしい考えあるいは発想を生み出し、それらを取り入れて、自分もよりよく育みたいという自ら学ぼうとする行為が生まれると結論付けることができるのではないだろうか。

今後は、さらに子どもたちが意欲的に取り組む体育学習を目指し、実践を積み重ねていきたい。